

〈編譯〉『古今圖書集成』とその編者について

曾貽芬・崔文印 原著

山口謠司

石川 薫

洲脇武志 編譯

筆者は先に、〈集部〉の機能について、特に「小説類」の分類を取り上げ、〈子部〉との関わりから思想性の推移について考察を試みた。^(注一) その際、「類書」が唐代の〈集部〉に重要な要素として浮かび上がる可能性あることを示唆し、中唐以降に現れる韓愈、柳宗元などに見られる文學性が、六朝期に行われたそれから切り離される段階で、「類書」が有効な働きをしたのではないかとの問題提起を行った。こうしたことは、『五經正義』の編纂を、過去の訓詁を集大成したとする考え方があるのとは別に、歴史的に堆積した「經」に對する注釋の構造自體を解體する必要があったのではないかと仮定出来るからである。そして、そこに現れた具體的な書物が「類書」類ではなかったのか。

しかし、この點をより具體的に明らかにするためには、現段階ではより過去の類書の歴史から推察を試みるより、寧

ろ、現代に近いものから時代を遡る形でこの點を考察することを選ぶ方が問題の焦點を定めるにも適當であるように思われる。中國に於ける百科全書と呼ばれる『古今圖書集成』について書かれたものの編譯を試みる理由である。

十七世紀初頭、ヨーロッパは、「マテシス」（計量學）と「タクシノミア」（分類學）をその構成原理とする古典主義時代に突入していた。この古典主義の背景なしには、「博物學」と「貨幣と價値の理論」と「一般文法」は生まれなかつたとされる。これをそのまま、中國に當て嵌めて考えることが出来るとは思わない。しかし雍正六（一七二八）年に印刷に附された『古今圖書集成』が、從來の「類書」とは一線を畫くする方法が取られていることは中國が古典的世界から近代化へ變容する時であつて、「知」を遺産として受け繼ぐ方法とは別に、より實學的方法へ轉換を迫られる時、「タクシノミア」（分類學）が果たした役割を考察する上で重要なものと推察するのである。

本編譯は、『中國文獻學史述要』所收「說《古今圖書集成》及其編者」を、著者の許可を得て行うものである。文獻學史については、古くは、餘嘉錫『目錄學發微』、また近年に於いては孫欽善『中國文獻學史』や本書の著者によって行われた『中國歷史文獻學史』、鄭士德『中國圖書發行史』等がある。しかし、從來の中國文獻學史を講じたものの多くは、ひとつひとつの文獻に對してこれを個別に概說するために文獻學史とは言いながら精神史を解く點に缺けるものがあつたり、或いは文獻の原文を列舉してその歴史性が構造的に見えにくかつた。これらの先行文獻に比較して本書を通讀するなら、概說である點は否めないものの、文獻學史に對する深い洞察に、屢々驚嘆する部分も多い。

數年前、筆者は本書を購入して後、一年餘をかけて私に翻譯を行った。そして一通りの下譯ができた段階で、中國語に熟達する石川薰（現、本學大學院中國語學專攻博士前期課程在學）、相村弓月氏に依頼して、別に下譯を願ひ、筆者の翻譯と照合した。また、昨年文部科學省科學研究費による北京出張の際に著者に近しく接して部分的な補足を頂き、

本書の翻譯の許可を得た次第である。ただ、今回、翻譯を掲載するに際し、中國語での文章表現と日本語とのそれによる違いも考慮し、全體的には著者の調査研究の意志を十分に尊重しながらも、文章を作成する段階では筆者が大幅に改編した。したがって、もし原著者の意志に反するところがあるとするれば、それは、原著者の責や石川の翻譯によるものではなくひとえに山口の責任である。

また、最終段階で、洲脇武志（現本大學大學院中國學專攻博士前期課程在學）に、本文の見直し、並びに本文引用文獻に直接当たってもらい、補注を含めた原稿の整理を願った。しかしこれももし不足の點、引用文獻の誤讀誤寫があれば、筆者が直接にそれに當たらなかったために生じたものである。

今回は、現在の筆者の研究と重なる部分もある本書卷末の「『古今圖書集成』とその編者について」を編譯するが、今後もし引き續き本書所收の論考を隨時編譯したいと考えている。不備誤讀等があれば、教えを乞う次第である。

（注一）山口謠司「〈集部〉機能についての一考察」『大東文化大學漢學會誌 第四十二號』（平成十五年 大東文化大學漢學會）

はじめに

『古今圖書集成』一萬卷は、康有爲が「『古今圖書集成』爲清朝第一大書、將以軼宋之『冊府元龜』『太平御覽』『文苑英華』、而與明之『永樂大典』（注一）（編譯者補注）競宏富者。」というように、古典的方法を踏襲して編集された最後の類書（編譯者補注）である。

詳しくは後に述べるが、類書とは言ってもその分類は從來のものを單に踏襲するのではなく、缺點を補いつつ新たな構成を試み、また文獻の引用についても先行の類書を遙かに凌駕する規模を有している。國外の學者に「中國百科全書」

と呼ばれている所以であろう。

しかし、こうした書物の評價に對し、編者陳夢雷（字は則震）は、編纂に二十年以上の歲月をかけたにも拘わらず、政治的な理由によって、その業績は雍正帝とその臣下に奪われ、しかも、その功績を辿る手がかりさえ残されていない。本章は、『古今圖書集成』の特徴とその價值を検討するとともに、陳夢雷が本書を編纂した過程について考察を加えた。

一、『古今圖書集成』の構成について

『古今圖書集成』は、三段階の類目形式によって構成される。

六つの「彙編」を設け、各「彙編」の下部には三十二の「典」を置き、その下に六千百九の「部」を置くという構成である。「部」は、従來類書に見られる「子目」を踏襲したものであるであろう。

分かり易くするために、ここにその一覽を示したい。

| 「彙編」名 | 「典」名 | 「部」數 | 卷 數 | 注 記 |
|-------|------|------|------|---------------|
| 歷象 | 乾象 | 21 | 100 | |
| | 歲功 | 43 | 116 | |
| | 歷法 | 6 | 140 | |
| | 庶徵 | 50 | 188 | |
| | | | | 計120部544卷 |
| 方輿 | 坤輿 | 21 | 140 | |
| | 職方 | 223 | 1544 | |
| | 山川 | 401 | 320 | |
| | 邊裔 | 542 | 140 | |
| | | | | 計1187部2144卷 |
| 明倫 | 皇極 | 31 | 300 | |
| | 宮闈 | 15 | 140 | |
| | 官常 | 65 | 800 | |
| | 家範 | 31 | 116 | |
| | 交誼 | 37 | 120 | |
| | 氏族 | 2694 | 640 | |
| | 人事 | 97 | 112 | |
| | 閨媛 | 17 | 376 | |
| | | | | 計2987部2604卷 |
| 博物 | 藝術 | 43 | 824 | |
| | 神異 | 70 | 320 | |
| | 禽蟲 | 317 | 192 | |
| | 草木 | 700 | 320 | |
| | | | | 計1130部1656卷 |
| 理學 | 經籍 | 66 | 500 | |
| | 學行 | 96 | 300 | |
| | 文學 | 49 | 260 | |
| | 字學 | 24 | 160 | |
| | | | | 計235部1220卷 |
| 經濟 | 選舉 | 29 | 136 | |
| | 銓衡 | 12 | 120 | |
| | 食貨 | 83 | 360 | |
| | 禮儀 | 70 | 348 | |
| | 樂律 | 46 | 136 | |
| | 戎政 | 30 | 300 | |
| | 祥刑 | 26 | 180 | |
| | 考工 | 154 | 252 | |
| | | | | 計450部1832卷 |
| | | | | 總計6109部10000卷 |

六つの「彙編」を設け、このように配列した理由について、編者は次のように記している。

法象莫大乎天地、故彙編首「曆象」而繼「方輿」、乾坤定而成位、其間者人也、故「明倫」次之、三才既立、庶類繁生、故次「博物」、裁成參贊、則聖功王道以出、次「理學」「經濟」、而是書備焉。^(注二)

本書編纂の意圖は、天、地、人、全ての庶類、聖功王道の内容を盛り込み、あらゆる方面の知識を集成することであった。表によっても知られるように、編纂の意圖は可成りの程度達成されていると言いうことが出来よう。

一方、こうした全體的に知識の集成を構成するという點に對し、各「部」の卷數は、「有一部而數百數十卷者、有一卷十餘部者」^(注三)と言われるように、均衡が取れてるとは見なし難い。

これは、ある意味、實狀に即して採録したために、無理に卷數を一致させようという目的がなかったためである。通常、各「部」には、「彙考」、「總論」、「圖」、「表」、「列傳」、「藝文」、「選句」、「紀事」、「雜錄」、「外編」という十個の項目を置き、それぞれ、各項目の必要に應じて、関連資料を集録する。ある部にその関連分野の資料がない場合は、その項目を設けることはない。實狀に即して、無理に項目を一致させようとしないうためである。

「彙考」が収録するものは、「部」における重要な事柄で、つまり「紀事之大者入于彙考。」と「凡例」に記されるものである。但し、「彙編」に収録される事柄には、年月の考證が可能なもの、もう一つは年月の考證が不可能なものが存在する。

これについては、

「大事有年月可紀者、用編年之體、做『綱目』立書法于前、而以按某書、某史詳錄于後、事經年緯、而一事之始末沿革展卷可知。」また、「一事之異同、疑誤、參伍可得。」と述べられている。

例えば「理學彙編」の「經籍典」に掲載される「史記部彙考」二卷を見てみたい。卷三七一には書法（原注：「綱」

のこと)を列記する。

- ①【漢】武帝太初元年十一月、太史令司馬遷作『史記』
- ②成帝河平五年、東平王求『太史公書』、不許
- ③【後漢】光武帝建武二年、范昇上『司馬遷「史記」違戾五經三十一事』
- ④明帝永平年、詔楊終刪司馬遷『史記』
- ⑤【唐】中宗嗣聖年、王元感上所注『史記』稿
- ⑥玄宗開元年、有人上褚無量『史記至言』十二篇、詔以絹賜其家
- ⑦【宋】太宗淳化五年七月、詔杜鎬等校『史記』
- ⑧淳化年、以『史記』付有司摹印
- ⑨眞宗景德元年、任隨等上『覆校「史記」刊誤』五卷
- ⑩大中祥符八年七月、上讀『史記』、作『史記』詩三首
- ⑪仁宗景祐元年、詔選官校正『史記』
- ⑫高宗紹興十二年、上親寫『史記』畢
- ⑬紹興十三年二月、內出御書『史記』列傳、宣示館職
- ⑭【金】廢帝天德三年置國子監、『史記』用裴駟注。自國子監印之、授諸學校
- ⑮世宗大定六年、進所譯『史記』、詔頒行之。

この十五條の「書法」は、成立から金朝までの約千年間に亘る『史記』についての批判、並びに次第に重視されるようになった流傳状況を、概ねに於いて列挙する。

これは、しかしあくまで「綱」であって、各綱の下にはさらに「目」を設けて、関連資料を引用する。

例えば、第一條「司馬遷作『史記』」の後に「太史公自序」を引用し、第七條「詔杜鎬等校『史記』」の後に『玉海』を引用し、「淳化年以『史記』付有司模印」の後に『文獻通考』を引用するが如きである。

ただ、注目すべきは、「史記部彙考」は、卷三七二の「彙考」の中にも見えることである。ここには『史記』の主要な注本だけでなく、『史記』に關する著録状況を引用する。前半には、順に、劉宋・裴駟「史記集解自序」、唐・司馬貞「補史記自序」、司馬貞「史記素隱自序」と「後序」、張守節「史記正義自序」、明・凌以棟「史記評林」の茅坤序、王世貞序、馮夢禎序、黃汝良序があり、後半部分には、『漢書』藝文志、『隋書』經籍志、『唐書』藝文志、『宋史』藝文志、宋・鄭樵『通志藝文略』、王應麟『漢書藝文志考證』、馬端臨『文獻通考經籍考』、明・王圻『續文獻通考經籍考』、焦竑『國史經籍志』など、『史記』や各注本に關する著録を収録する。

年月の考證が不可能な事柄について、「彙編」は

「則列經史于前、而以子集參互于後、雖歲月未詳、而時代之後先、一事因革損益之源流、一物古今之稱謂、與其種類性情及其製造之法、皆可概見矣。」^(正四)と記す。

例えば、「天地總部彙考一」は、『易經』繫辭上傳、『禮記』曲禮・月令、『春秋緯』感精符、『河洛緯』括地象、『大戴禮』曾子天圓、『晉書』天文志、『宋書』天文志、『隋書』天文志、朱程榮『三柳軒雜識』天地形體を「經史子集」の順序で資料を集録し、天地に關する歴代の各種見解を示すのである。

各「部」の「彙考」の後には、續いて「總論」を置く。總論とは、部（つまり、子目）に對する古今の評論をまとめたものである。

例えば、「史記部總論」は、古今の『史記』に對する重要な評論を集録する。唐・劉知幾『史通』六家篇中の『史記』

に關する部分、次に、明・凌稚隆『史記評林』所收の『諸家總評』に引き續き鄭樵、晁無咎、蘇洵、蘇轍、葉盛、李清臣、呂祖謙、秦觀など宋、明の學者二十六名の評論に及ぶ。『史記』に關する重要な評論は、ここに網羅されていると言つても過言ではない。

各「部」の「藝文」については凡例に、

「以詞爲主、議論雖偏而詞藻可采者、皆在所錄。篇多則擇其精、篇少則瑕瑜皆所不棄。大抵隋唐以前從詳、宋以後從略。」^(注五)と記される。

ここに収録されるものは、詩詞を除けば、大部分は史書の論贊、或いは讀史の感慨に及ぶ。これは、『文選』の選文基準である「事出于沈思、義歸乎翰藻」を承けたものであろう。

各「部」の「紀事」と「雜錄」は、それぞれ「彙考」、「總論」、「藝文」を補足する。

「凡例」には、これにつき、「大者入于彙考、其瑣細亦有可傳者、皆按時代列正史于前、而一代稗史、子集附之。」^(注六)「亦有後人雜記而及數代以前之事者……仍采附于前。」^(注七)と記される。

「史記部紀事」を例に挙げれば、『漢書』楊敞傳について、彼の息子の楊惲に觸れ、さらに、

「惲母、司馬遷女也。惲始讀外祖『太史公記』、頗爲『春秋』。以材能稱。」の文を掲載する。こうした記載は「煩細」の嫌いはあるものの、『史記』について言えば傳えるべき價值なしとは言えない。これは、司馬遷の社會關係や『史記』の流傳情況などを理解する上で、参考にすべき價值を多少とももっているからである。

こうしたことは、また『三國志』王肅傳に見られる、皇帝の「司馬遷以受刑之故、無懷隱切著『史記』」という問いに對する「司馬遷記事不虛美、不隱惡……漢武帝聞其述『史記』、取孝景及己本紀覽之、于是大怒、削而投之、于今此兩紀有錄無書。後遭李陵事、遂下遷蠶室。此爲隱切在孝武而不在于史遷也。」にも及ぶ。

これもまた『史記』の成立、司馬遷に對する評價を検討するには見逃さるべきものであろう。このような資料は、全て「紀事」類に収録されている。

「紀事」を「事」とする立場、つまり史實に重點を置いているすれば、「雜錄」は「論」と「藝文」に重點が置かれている。この「凡例」の規定によれば、

「聖經之言多入總論。亦有非正論此一事、而旁引曲喻偶及之者、則入雜錄。至于集中所載、或有考究未眞、難入于彙考、議論偏駁、難入于總論；文藻未工、難收于藝文者、則統入于雜錄。」^(注八)という。「雜錄」は、史傳や筆記の瑣事を多く掲載する。偶々その部の内容に觸れている場合に於いても、關連する記事が「雜錄」に収録される場合もある。例えば、宋の徐度『却掃篇』の唐・杜佑に關する記載などがその例である。「少時節『史記』一編、字如蠅頭、字字端楷、首尾如一、又極詳備、如『禹本紀』九州所貢名品略具。」

これは、文章は、杜佑が幼少の時讀書に專念したという事を記したものに他ならない。しかし、杜佑が『史記』を讀んだことに觸れているため、この一文をも「史記部雜錄」に収録する。

『古今圖書集成』の「雜錄」は、まさに「雜」といふべきものであるが、煩瑣なるものを漏らさず掲載する原則に則つたものと見ることが出来る。

また「外編」を設けている部もある。これは、その部に關連する釋道二書の言論を主に収録する。「方外」であるため、「外編」と呼稱するのであろう。

以上見てきたように、各部の「彙考」、「紀事」は事を重視し、「總論」、「雜錄」は論を重視する。歴史資料をこのように「事」と「論」に分ける方法は、馬端臨の影響を受けていると言えるであろう。馬端臨は、『文獻通考』自序で、

「凡敘事、則本之經史、而參之以歷代會要以及百家傳記之書、信而有徵者從之、乖異傳疑者不錄、所謂文也。凡論事、

則先取當時臣僚之奏疏、次及近代諸儒之評論、以至名流之燕談、稗官之記錄、凡一話一言可以訂典故之得失、證史傳之是非者、則采而錄之、所謂獻也。」

と言う。『古今圖書集成』の編者は、基本的にこの規定に従っており、單に、具體的な處理において多少異なるにすぎない。例えば、釋道は

「二氏之書、所紀有荒唐難信及寄寓譬託之辭、臆造之說。」^(注九)

であるから、馬端臨の「不録」の列に分類すべきだが、『古今圖書集成』の編者は、「又疑于挂漏。」^(注七)としている。

こうした理由によって、それらを全て「外編」に分類する。同じ子目に屬す資料であるにも拘わらず、編者は、資料自體の情況に應じて區別したのである。つまり、大事と正論に屬すものを、それぞれ「彙考」と「總論」、瑣事と非正論に屬すものを、それぞれ「紀事」と「雜錄」に分類する。しかも、「挂漏」を防ぐため、釋道の言をも収録する。

本來、収録する資料の分類、或いは類ごとの資料収集は、中國の類書に固有な特徴である。しかし、『古今圖書集成』は、從來の類書とは少し異なり、類ごとに資料を収集し、さらに、こうした資料を事と論、主と次、輕と重にはっきり分けており、細大漏らさず、細かく分析している。これは、『古今圖書集成』の大きな特徴と言えるものである。

また、文献の引用という點に於いても、『古今圖書集成』は、先行の類書とは明らかに異なる引用の方法を採用する。從來の大多數の類書は、古くからの形式を踏襲し、引用文は斷章零句である。しかし、『古今圖書集成』は、引用文献の系統性・完全性を重視する。例えば、『藝文類聚』天部上「天」字條に引用される『楚辭』天問篇は、

「圖則九重、孰營度之。八柱何當。東南何兮。日月安屬。列星安陳。」

という數句のみを引用するが、『古今圖書集成』の「天部」藝文は、「天問篇」を全文収録する。

また、『太平御覽』天部下は、『淮南子』の「四時天之吏、日月天之使、星辰天之期、虹蜺彗星天之忌」という文章を

引用しているが、これに對し『古今圖書集成』の「天部彙考」は、出典を明示して『淮南子』天文訓を一字漏らさず収録する。こうした引用の方法は、『永樂大典』の方法を踏襲したものと窺い得る。しかし、『永樂大典』の書物引用には規定がなく、系統性という点から言っても『古今圖書集成』は『永樂大典』に比して非常に精緻である。

さて、最後に、本書に附された「圖」について觸れたい。

南宋・鄭樵は、「古之學者爲學有要、置圖于左、置書于右、索象于圖、索理于書、故人亦易爲學、學亦易爲功（中略）後之學者離圖卽書、尙辭務說、故人亦難爲學、學亦難爲功（後略）」^{（卷十一）}と云う。

〈類書〉に、圖を付すものは『古今圖書集成』のみである。掲載される圖は、山川、國土の圖のみならず禽獸、草木、器用に及ぶ。また科學技術分野の文獻についても文章を抄録することなく掲載しその文中に記される事象についてもこれを説明するために圖を使用する。

例えば、「乾象典」の「天地總部彙考二」所收の明・陽瑪諾「天問略」は、「十二重大圖」、「二十四氣日輪距赤道遠近圖」、「月正當日下見食圖」など二十三枚の圖を収録しており、文章だけでは不明の點を明らかにする。また、日蝕について、陽瑪諾は、「日蝕非日失其光、乃月掩其光也。月之天在日天之下、朔時月輪正過日輪之下、南北同經、東西同緯、故掩其光若有失之耳。」と述べるが、これにも圖を配す。西洋の天文などの科學技術を重視するのは、康熙時代の社會的風潮であった。こうした影響が『古今圖書集成』にも現れていると言えるであろう。^{（編譯者補注三）}

二

雍正四（一七二六）年、雍正帝は『古今圖書集成』に篇序を書き、故意に本来附すべき編者を隠し、大臣・蔣廷錫の

名を記した。序文には次のように述べている。

「皇考聖祖仁皇帝（中略）乃命廣羅群籍、分門別類、統爲一書、成冊府之鉅觀、極圖書之大備。而卷帙浩富、任事之臣、弗克祇承、既多訛謬、每有闕遺、經歷歲時、久而未就。朕詔登大寶、思繼先志、特命尙書蔣廷錫等董司其事、督奉在館諸臣、重加編校。窮朝夕之力、閱三載之勤、凡厘定三千餘卷、增刪數十萬言、圖繪精審、考定詳悉。書成進呈、朕覽其大凡列爲六編、析爲三十二典、其部六千有餘、至卷一萬（後略）」

さて、この「弗克祇承」した「任事之臣」は、一體、誰なのか。雍正帝は、觸れていない。

ただ、雍正帝は即位してまもなく、敕令の中で、この「任事之臣」と自分が『古今圖書集成』を編纂したと明確に述べている。この敕令は、今日、『清實錄』の『世宗實錄』卷二に、見ることが出来る。康熙六十一（一七二二）年十二月癸亥（十二日）の敕令は以下の如きである。

諭内閣九卿等、陳夢雷原系叛附耿精忠之人、皇考寬仁免戮、發往關東。後東巡時、以其平日稍知學問、帶回京師、交誠親王處行走。累年以來、招搖無忌、不法甚多、京師斷不可留。著將陳夢雷父子發遣邊外。或有陳夢雷之門生、平日在外生事者、亦卽指名陳奏（中略）爾等毋得徇私隱蔽。陳夢雷處所存『古今圖書集成』一書、皆皇考指示訓誨、欽定條例、費數十年聖心、故能貫穿古今、彙合經史、天文、地理皆有圖記。下至山川草木、百工製造、海西祕法、靡不備具、洵爲典籍之大觀。此書工猶未竣、著九卿公舉一二學問淵通之人、令其編輯竣事、原稿內有訛錯未當者、卽加潤色增刪、仰副皇考稽古博覽至意。

これを見るなら、『古今圖書集成』の編纂者が陳夢雷であることは明らかである。雍正帝は、陳夢雷を再度流刑に處し、『古今圖書集成』の原稿を奪うため、その名を記す他なかったのである。しかし、これは、陳夢雷が眞の編者であ

るといふ事實を證明し、將來の偽りの言を暴露することになる。

陳夢雷は、晩年、自著詩文集『松鶴山房文集』二十卷、詩集九卷(年十二)を編纂した。この文集中、特に、卷二に收められた「上誠親王彙編啓」は、『古今圖書集成』編纂の経緯を知る上できわめて貴重な文献と言えよう。

雷以萬死餘生、蒙我皇上發遣奉天、又沐特恩召回京師、侍我王爺殿下筆墨。恭遇我王爺殿下睿質天縱、篤學好古、禮士愛人、自慶爲不世合遭逢、思捐頂踵、圖報萬一。無奈賦命淺薄、氣質昏愚。讀書五十載、而技能一可稱、涉獵萬餘卷、而記述無一可舉。深恐上負慈恩、惟有掇拾簡編、以類相從、仰備顧問。而我王爺聰明睿智、于講論經史之餘、賜之教誨、謂『三通』『衍義』等書詳于政典、未及蟲魚草木之微、『類函』『御覽』諸家、但資詞藻、未及天德王道之大。必大小一貫、上下古今類列部分、有綱有紀、勒成一書、庶足以大光聖朝文治。雷聞命踊躍、喜俱交竝、自揣五十年來無他嗜好、惟有日抱遺編、今何幸、大慰所懷。不揣蚊力負山、遂以一人獨負斯任。謹于康熙四十年十月爲始、領銀雇用人繕寫。蒙我王爺殿下頒布協一堂所藏鴻編、合之雷家經史子集、約計一萬五千餘卷。至此四十五年四月內、書得告成。分爲「彙編」者六、爲志三十有二、爲部六千有零。凡在六合之內、巨細畢舉。其在「十三經」、「二十一史」者、只字不遺。其在稗史子集者、十亦只刪一二。以百篇爲一卷、可得三千六百餘卷、若以古人卷帙較之、可得萬餘卷。

また續けて、次のように述べている。

雷五載之内、日營手檢、無閒晨夕、幸而綱舉目張、差有條理。謹先眷目錄、凡例爲一冊上呈、伏維刪定。贊修上聖之事、雷何人斯、寧敢輕言著述。不過類聚部分、仰待我王爺載酌、或上請至尊聖訓、東宮殿下睿旨、何者宜存、何者宜去、何者宜分、何者宜合、定其大綱、得以欽遵檢校。或賜發祕府之藏、廣其所未備、然後擇于江南、浙江都會之地、廣聚別本書籍、令精力少年分部讎校、使字畫不至舛訛、繕寫進呈、恭請御制序文、冠于書首、發付梓人刊刻。

較之前代『太平御覽』『冊府元龜』、廣大精詳、何止十倍。從此頒發四方、文治昭垂萬世、王爺鴻名卓越、過于東平、河間、而草茅愚賤效一日犬馬之勞、亦得分光不朽矣。

ここに示される點を整理すれば、次のようなことが言えるであろう。

①陳夢雷は誠親王胤祉の筆墨を務めていたため、『古今圖書集成』編纂以前に、すでに「掇拾簡編、以類相從、仰備顧問」と。恐らく、陳夢雷は文献資料の分類や編纂に才能があったこと。

②『古今圖書集成』編纂を、「上下古今類列部分、有綱有紀」という形にするというのは、誠親王胤祉の考えである。これは雍正によるものではなく、康熙帝によって提唱されたものであること。

③編纂にあたり、編纂局を設けず、陳夢雷一人が擔當した。いわゆる「遂以一人獨肩斯任」である。他の人は、「領銀雇人繕寫」であったにすぎない。

④編纂に利用した圖書は内府の圖書ではなく、誠親王胤祉の協一堂藏書と陳夢雷の藏書、合わせて一萬五千卷以上であること。

⑤編纂には五年を費やし、完成した段階では、改善すべき部分も残されていた。それは、主に、収録する文献の取舍・分合の修訂であり、さらなる讎校であること。

⑥當初、全體的な名稱はなく、六つの「彙編」名だけがあったこと。

⑦書名については目録と凡例を進呈してから、康熙帝より賜ったこと。さもなくば、雍正が即位まもなく『古今圖書集成』という名稱を用いるはずはない。雍正が康熙六十一年の敕令の中で、『古今圖書集成』の原稿は陳夢雷のところにあると明言していることから、決して雍正が命名したのではなく、雍正の即位以前に命名されていることがわかる。しかし、もし、雍正と皇位を争った誠親王胤祉が命名したなら、雍正はこの書名を用いたであろうか、この點は疑問

として残される。

陳夢雷の生涯は、不幸の連続であった。なかでも、艱難の中、李光地と出会ったことは、彼をその後に及ぶ悲劇へと導いていく。

陳夢雷は、康熙九年（一六七〇）、十九歳で進士に合格し、翰林院の編修を任じられた。しかし康熙十二（一六七三）年、故郷の福建侯官に歸省するや、「三藩の亂」に巻き込まれ、耿精忠の支配に入り、偽官にさせられた。陳夢雷は、李厚菴（原注…李光地）との『絶交書』の中で、次のように、この時の経験を述べている。

昔甲寅之變、不孝遁跡僧寺、逆黨刃脅老父追尋、不孝挺身往代、刀鉞林立、蹀屍踐血、不孝恬不爲動。見賊不跪、語不爲屈、以爲苟得全親、一身死不足恨耳。逆怒、將寘于刑、已復放歸、不孝卽削發披緇、杜門旬日、逆賊分曹授官、不以相及、自幸得免、賊臣數以遍加網羅。防杜不測、遂脅以僞官。然不孝就拘而往、不受事而歸、辭其印札、不赴朝賀、瘠形托病、三年一日、此通國所共聞、有心所共嘆、不假不孝一二談也。（在十三）

これよりすれば、陳夢雷が決して本心から反逆者側にいたのではないことは明白である。ちょうどそのころ、陳夢雷と同年の進士であり、同じく翰林院の編修を任じられた、同郷人の李光地も安溪に歸省していた。しかし、李光地は自發的に耿精忠のところに赴いたため、陳夢雷は立腹した。しかし、結局自分は「只手回天、孤立無輔」（在十四）と考え、反逆將軍におどおどした態度をとっている李光地と、

「共議、促膝三日、凡耿逆之狂悖、逆帥之庸闇、與夫虛實之形、間諜之計、聚米畫灰、靡不備悉。」（在十五）
ここで二人は、

「不孝（原注…陳夢雷の自稱）身在虎穴、當結楊道聲以潰其腹心、離耿繼美、以墮其羽翼、陰合死士、以待不時應。」

年兄（原注：李光地を指す）遁跡深山、間道通信、歷陳賊勢之空虛、與不孝報稱之實蹟、庶幾稍慰至尊南顧之憂（後略）」という計畫を立てた。陳夢雷は、李光地に、

「他日幸見天日、我之功成、則白尔之節、尔之節顯、則述我之功。」（在十〇）

と述べる。しかし、陳夢雷の期待は、儂く消え去った。李光地は都へ戻ると密奏を行い、全く陳夢雷の名に觸れなかったのである。陳夢雷に対する裏切りである。結果として、李光地はこの功績により出世し、陳夢雷は反逆者側について疑いで斬罪を言い渡された。幸いにも、當時都にいた同僚の徐乾學がひそかに助けてくれたため、陳夢雷は死罪を免れ、康熙二十一年（一六八二）年、守備兵として奉天尙陽堡に流された。『清史稿』には、

「及精忠敗、夢雷以附逆逮京師、下獄論斬。光地乃疏陳兩次密約狀、夢雷得以減死戍奉天。」（在十七）と記される。しかし、これは事實とは見なし難い。陳夢雷は、邊境で學問に専心した。『周易淺述』の著述、地方當局のために『盛京通志』、『承德縣志』、『海城縣志』、『蓋平縣志』等を撰修する。康熙三十七（一六九八）年、康熙帝が瀋陽を東巡した際、献上した賦が皇帝の意にかなない、彼は京師に呼び戻された。こうして、『古今圖書集成』を編纂する機縁に恵まれたのである。

「上誠親王彙編啓」で述べる如く、『古今圖書集成』は、康熙四十五（一七〇六）年にはほぼ完成し、康熙六十一（一七二二）年、雍正帝が陳夢雷を再度邊境に派遣する命を下し、『古今圖書集成』の原稿を剥奪する。この十五、六年に及ぶ歲月の間、陳夢雷はこの書を完全なものにしようとしていたのである。陳夢雷が『古今圖書集成』を自著と見なしていることは、『松鶴山房詩集』卷五の「水村十二景」の文章によって明かであろう。小引には、次のように記される。

水村在城西北、河流環繞、榆柳千株。舊有監司建樓、其地俗呼「一間樓」。後入貴戚、而臺榭增設矣。吾王殿下購得、命餘居之、賜河西田二頃、俾得遂農圃之願也。續建鬪閣三楹、晨夕祝聖、命餘典其事。有亭供蓬島諸仙像、知

餘素學內視、賜榻一、亦願犬馬之稍延殘喘也。餘兼置琴一張、舊曲皆忘、撫弦適意而已、釣竿一具、不必皆得魚也。其下書室三楹、貯所著『彙編』三千餘卷。校閱之暇、泛艇渡河、與田夫野老量晴較雨乃歸（後略）

以上の文章からは、次のことが知られるであろう。

①陳夢雷の『古今圖書集成』編纂は、それを行うための環境と條件に恵まれていたこと。

②『古今圖書集成』の撰修には、局を設立せず、全く陳夢雷個人のことであるため、彼の自宅で行われた。

③彼は、要旨を述べ形式を定め、抄録すべき文章を示し、清書させた。彼の主な作業は、「進彙編啓」に述べられている「廣聚別本」、「分部讎校」である。本来、この作業は、「令精力少年」して完成させる豫定であったが、実際には、彼自身が行ったようである。そのため、十年以上かかり、ずっと稿本として自家に保存されていた。彼が『小引』の中で述べている「校閱之暇」云々は、まさしくこの状況を反映している。

④特筆すべき點は、この書は「著」であり、「編」ではないと陳夢雷が述べていることである。ここから、彼が『古今圖書集成』を自著と見なしていたため、重視し、他者の手を借りなかったことがわかる。

⑤陳夢雷が「進彙編啓」で明言した通り、『古今圖書集成』は「分爲『彙編』者六、爲志三十有二、爲部六千有零（中略）可得萬餘卷。」現存する雍正時代に印刷された『古今圖書集成』と照合すると、「志」が「典」に変わっている以外、全て陳氏の言と一致している。ここから、雍正がこの書の序で述べた「重加編校」云々は、全く根拠がないことがわかる。このような虚言は、他人の業績を奪ったことを隠すものであり、また、皇位争いのために兄弟やその臣下を迫害した残酷な政治を美化するものである。

雍正による過去の悪行清算のため、康熙六十一（一七二二）年、陳夢雷は、再度守備兵として黒龍江省に流適され、乾隆六（一七四一）年、九十數歳という高齢で、僻地に斃れた。陳夢雷は、生前、自身の苦勞の成果である『古今圖書

集成』がすでに刊行されたことを知っていたが、そこには彼について一言もなく、業績は雍正帝とその臣下により徹底的に奪われた。

三

『古今圖書集成』は、雍正六年（一七二八）に始めて銅活字版を用い、試験印刷された見本書一部を合わせて、六十部が出版された。（編譯者補注四）本文は一萬卷、目錄四十卷、五〇二〇冊に分冊（中二十冊を目錄）されている。印面美麗、校勘もまた精巧であった。

光緒初年、イギリス人のアーネスト・メージャーとフレデリック・メージャー兄弟が上海に来て、『申報』館を設立する。光緒十（一八八四）年、彼らは「圖書集成印書局」を設立し、三號の扁體字を用い、『古今圖書集成』を組板印刷した。四年の年月を經、光緒十四（一八八八）年、計千五百部が印刷された。本書は「扁體本」、或いは「メージャー版」と呼ばれている。ただ、この本は校勘が粗雑で誤りも多く、善本とは呼べないが、廣く流行したものである。

光緒十六（一八九〇）年、光緒帝は、『古今圖書集成』を石版印刷するよう詔を下した。最終的に上海同文書局が印刷を引き受け、光緒二十（一八九四）年に完成した。雍正本本來の様式に従い、合わせて百部が印刷された。この刊本の最大の特徴は、本文以外に、『考證』二十四冊が追加された點である。本文は五〇二〇冊のまま、『考證』二十四冊を合わせて五〇四四冊ある。一部分が國外に運ばれたことを除けば、大部分が火災により上海の倉庫で燃えたため、流傳した版本は稀少である。

一九三四年、中華書局は、『古今圖書集成』の縮刷本を出版した。用いた寫眞版底本は、康有爲所藏の雍正銅活字本

である。康有爲は、跋語で、

「此本自吾邑葉氏領運自京而來粵、費萬金、後歸吾邑孔氏、今歸于我。」(注十八)

と述べている。現在の縮刷本にも、「南海葉華溪珍藏」、「孔氏嶽雪樓收藏書畫印」、「南海康有爲更生珍藏」などの藏書印が見える。しかも、中華書局は、同文書局本が附した『考異』を浙江省立圖書館から借り、合わせて縮刷した。合計八〇八冊、そのうち一冊目から六冊目が目録、七冊目から八百冊目が本文、八〇一冊目から八〇八冊が『考證』である。これは、今日まで最も通行し、最も精確なものである。

『古今圖書集成』は、その規模により、海外でも好評を博した。イギリス人ジャイルズ (J・Giles) は、本書のために『中國百科全書字順索引』を編纂し、

「第十一版『大英百科全書』は、字数が約四千萬ある。中國語百字の翻譯には、英語が約百五十字必要である。したがって、『圖書集成』は、最も大きい英語の百科全書の三、四倍あると言える。」(注十九)

と賞賛する。ジョセフ・ニーダムは、その著書『中國科學技術史』第一巻の參考文獻略述において、「我々が常用できる最大の百科全書は『圖書集成』である。」と述べている。いずれも、外國の學者が『古今圖書集成』を重視していたことを示している。

一九八九年、中華書局と巴蜀出版社が本書を重印した際、ようやく廣西大學が『古今圖書集成索引』を作成した(編譯者補注六)。明らかに、中國における『古今圖書集成』の開発、利用は不十分である。我々は、この書を調べ直し、特に校勘と輯逸の分野を重視して、開發、利用を進めていく必要がある。

【原注】

(注一) 康有爲『古今圖書集成』の跋。中華書局縮印本第六冊目末に収録。

(注二) (注十) 『古今圖書集成』巻首「凡例」参照。

(注十一) 『通志』圖譜略索象

(注十二) 陳氏のこの本は希覯本である。北京圖書館には二部收藏され、詩九卷は二部共に揃いであるが、一部は文集二十巻中、三・十二・十四巻を缺き、もう一部は文集二十巻總てを缺く。中國科學院圖書館にも一部收藏されているが、こちらも文集二十巻中、三・十二・十四巻を缺き、詩九卷・文集の巻十・巻十五から十七は寫本で補われており、その全貌を知ることができない。

(注十三) この文は『松鶴山房文集』巻十三、『閑止書堂集抄』巻一に見える。後者は陳氏の側に仕えた楊昭が編集したもので、上海古籍出版社から影印本が出ており、『清人別集叢刊』に収録されている。

(注十四) 注の十三参照

(注十五) 『松鶴山房文集』巻十三、『閑止書堂集抄』巻一「與李厚菴絕交書」

(注十六) 『松鶴山房文集』巻十三、『閑止書堂集抄』巻一「與李厚菴 絕交書」

(注十七) 『清史稿』巻二六二李光地傳

(注十八) 康有爲『古今圖書集成』の跋。中華書局縮印本第六冊目に後録。

(注十九) 張滌華『類書流別』盛衰第四參照。

(編譯者補注一) 康有爲が本書の影印に家藏本を提供したことは、本書が百科全書的役割を擔って社會變革への思想的基盤を持ち得たことを示唆する。これは、フランス革命を引き起こすための意識の變革として『百科全書 (Encyclopedie)』が編纂されたことを改めて考えさせるにあまりある。近年上海博物館、天津圖書館に保存された『大同書』の草稿本が公刊された(『康有爲大同書手稿』江蘇古籍出版社、一九八五年)。これによれば、『大同書』作成の段階で、彼は特に近代的科學技術の成果を多く採用しつつ、原稿が改めて行った經緯を見ることが出来る。科學技術的面が、従來の「類書」にはほとんど採録されず、『古今圖書集成』を踈たなければならなかったこと、また、康有爲の思想との關連からも考察されるべき點があると考えられる。

(編譯者補注二) 『中國大百科全書』が、中國國務院から出版されたのは、一九七八年である。この前言の中に、編集部は中國に於ける「類書」の傳統を述べ、しかしこれらは「各種類書體制不一、多少接近百科全書類型、但不是現代意義的百科全書」とする。『中國大百科全書』に於ける『Britanica』的各専門分野別に分巻されたものとを比較するなら、『古今圖書集成』は、いまだ中國の古典的方法に依ったものとの判断を下されることは否めない。しかし、『古今圖書集成』は、その規模やまた独自の分類方法の構成などを見るに、古典的世界からの脱却を示す可能性が既に萌芽しているものと思われる。

(編譯者補注三) 科學技術に關するものが『古今圖書集成』に盛り込まれていることは、特筆すべきことである。フランス『百科全書』に於ける思想性は、まさしく合理的近代科學の方法が樹立されることを意味していた。ブリューシュ(一六八八—一七六一)が百科全書的構成で著した『自然の景觀』が、産業や技藝をも含めて題材としているにも拘わらず、全ての自然は神の配慮で創造されているとする宗教的信念が濃厚で、科學技術を多く掲載するデイドロ、ダランベールによる『百科全書』が出版されてからは、單なる博物學書として惡評されるに及んだ。合理性とは、つまり諸學藝間の連關をつける體系的構造を言うのであって、「景觀」として眺める受動的なものではない。陳夢雷の文章に、こうした合理性を説く部分を未だ見つけることは出来ないが、科學技術に關するものが多く掲載されていることは、フランス『百科全書』と比較して見るとき、興味深い點がある。

(編譯者補注四) 雍正による銅活字本は、慶應義塾圖書館に卷一一一から卷一三六の零本八冊が所藏される。佐藤仁之助舊藏書。(『阿部隆一遺稿集 第二卷 解題編一』所收「慶應義塾圖書館新收善本解題」一九八五年汲古書院) 参照。

比較の爲に記せば、デイドロ、ダランベールの『百科全書』の最初の趣意書は、一七五〇年に八千部配布されている。そして、一七五一年から二十年をかけて執筆編集構成したものが本卷十七卷・圖卷十一卷、更にマルモンテルが以後八年餘を費やして補卷他七卷を加えた。この時の發行部數については不明である。

(編譯者補注五) 邦訳は、『中國の科學と文明』第一卷東畑精一・藪内清監修、思索社 一九七四。

(編譯者補注六) 我が國では、大正元(一九一二年)、すでに文部省から『古今圖書集成分類目錄』が出されている。

本稿は、平成十五年度、文部科学省特定地域研究(二)の研究成果の一部である。